

## 2013年度 FDワークショップ(授業見学)開催報告

授業見学と意見交換会をセットにしたFDワークショップを開催しました。次期カリキュラム改革に向け、「ファーストタイムプログラム」が全学的に注目されています。このことを踏まえ、本年度は、2学部における初年次演習科目を対象とさせて頂きました。

### 第1回「協同学習のプロセス — グループ・ワークで伸ばす 問題発見、論理的思考、コミュニケーションの力 —

[ 11/13(水) ]

異文化コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科助教高みか先生が担当する「基礎演習2」の授業を見学しました。同学部の必修科目である「基礎演習1」(前期)、「基礎演習2」(後期)では、学生たちが主体的に問いを発見し、それに取り組むための力を養うために、グループ・ディスカッションによる協同学習の機会を多く設けています。当日は、課題文献の予習にもとづいて、学生たちがグループ・ディスカッションを展開する様子を見学しました。ディスカッションの手順は細かく指定されています。前期からこの手順に慣れている学生たちは、開始直後から一人一人積極的に発言していました。

授業見学後の意見交換会には、基礎演習2を統括している山田久美子先生(同学部教授)にも同席頂きました。構造化されたディスカッションをさせることに成功しているといったコメントや、ディスカッションへの教員の介入がほとんどなかったがその点についてどのような方針が共有されているのかといった質問があり、両先生より丁寧に回答頂きました。



意見交換会(第1回)の様子 奥左側が高みか先生、奥右側が山田久美子先生



授業見学(第2回)の様子 奥中央が関根佳恵先生

### 第2回「英文教材を用いた経済学的思考の訓練

#### — 経済学部「基礎ゼミナール2」の取り組み —

[ 11/19(火) ]

経済学部では、独自に編集した共通テキストを用いて、初年次演習科目「基礎ゼミナール1」(前期)、「基礎ゼミナール2」(後期)を実施しています。「基礎ゼミナール2」は、時事経済に関する英文の読解を通じて、経済英語のみならず経済学の基礎的な概念や思考方法を修得させることを目標としています。なお、授業の具体的なスケジュールや運営は、一定のルールのもとで約20人いる各担当教員に委ねられています。

今回は、同学部経済政策学科助教関根佳恵先生の授業を見学しました。関根先生は約20人の学生を3班に分け、毎週「訳・報告」「司会・発音」「質問」の3つの担当をローテーションさせています。当日はまず、テキストの英文の内容を丁寧に確認し、それからディスカッションに入りました。学生たちが、英語という壁と、そこで論じられているトピックという壁の両方と格闘していることが非常によく分かりました。授業見学後の意見交換会では、同科目の趣旨に関する質問が多く、そのほか関根先生の試行錯誤の軌跡についてご教示頂きました。

両日程とも多数のご参加を頂きましたことに、この場を借りて御礼申し上げます。なお当ワークショップの詳細については、2014年3月に刊行する大学教育開発研究シリーズNo.20『アクティブな学びをデザインするvol.3』をご覧ください。

学術調査員 谷村英洋

# Rikkyo Education

Rikkyo Educationは、立教大学の各学部で行われている授業実践や教育上の取り組みなどを紹介するコーナーです。第2回目となる今号では、法学部について学部長の佐々木卓也教授にお話を伺いました。

## 時代を見据えた法学部教育の取り組み

法学部長 佐々木 卓也 教授

### キャリア意識を低年次から形成

**Q：**法学部では、「キャリア意識の形成」という科目や1年次生向けの「基礎文献講読」について積極的に改善を行っているとのこと。「キャリア意識の形成」とはどのような授業なのでしょうか。

**佐々木：**「キャリア意識の形成」は、学部OB・OGをゲストスピーカーとして招き、ご自身のキャリアについてお話をしていただく授業です。年齢や職種は様々で、入社して欲しい10年くらいの方が多いのですが、中には大変なベテランもいらっしゃいます。ご自分の経験、学生・社会人生活を語っていただくことで、学生が将来の進路、就職活動、キャリアについて考える手がかりを得る、そんな機会を提供したいと考えています。ゲストスピーカーの話の後、学生はグループディスカッションと質疑応答を行い、授業後にはコメントカードやレポートを提出します。それらについては添削後、学生に返却しています。

**Q：**「キャリア意識の形成」は今後、どのように発展していくのでしょうか。

**佐々木：**これまで、3年次前期に開講していましたが、来年度からは2年次後期に移行します。来年度以降、就職活動の

開始が少し遅くなりますが、学生にはできるだけ早く、自分のキャリアについて考えて欲しいと願っています。「キャリア意識の形成」を受講した学生からも、授業アンケートを通じて、「もう少し早く受けたかった」という声を聞いています。学部OB・OGの話ですと、学生達は自分の人生設計についてより具体的なイメージを持つことができるようです。

なお法学部では「キャリア意識の形成」に加え、今年度から学部独自のキャリア関係の講演会を開催しており、この種の企画は来年度も実施する予定です。

### 「基礎文献講読」で大学での学びをサポート

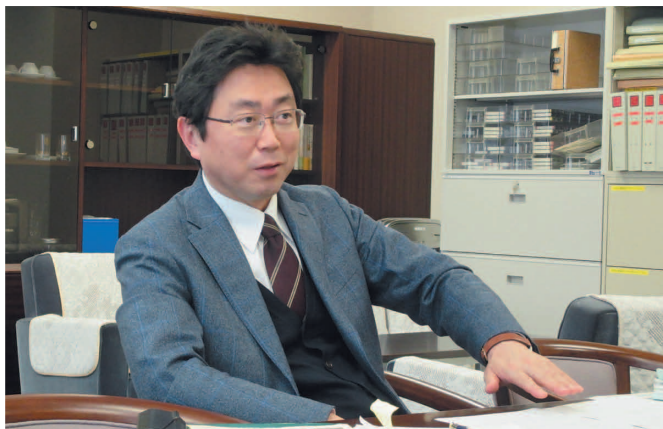
**Q：**つぎに「基礎文献講読」についてお聞かせ下さい。この科目は法学で学ぶための基礎的なスキルを修得する場だと伺っています。「基礎文献講読」では、どのような点を工夫しているのでしょうか。

**佐々木：**「基礎文献講読」は現在、1年次の学生のほとんどが履修する事実上の必修科目になっています。ここでは、法学部に入ったばかりの新入生に対して、法学部生としてのいわばお作法を身につけて欲しいと思います。法学部では、『立教大学法学部ラーニングガイド』を作成し、「文献・資料の探し方」、「レファレンス・ガイド」、「レジュメの作り方」、「発表とプレゼンテーション」、「レポートのまとめ方」などについて丁寧な説明、解説をしています。「基礎文」（「基礎文献講読」の略称）ではこの冊子を補助教材に、法学・政治学の基本的なテキストを読みながら、ディスカッションをおこないます。



各年度『立教大学法学部ラーニングガイド』

**Q：**大学1年次に『立教大学法学部ラーニングガイド』を使用している「基礎文献講読」の実践から成果は実感されますか。



佐々木 卓也 法学部長

**佐々木:** やはり3ヵ月間「基礎文」を続けると、学生は変わります。教員は毎週報告を担当する数名の学生を直接指導しますので、レポートやレジュメの書き方はもちろん、いろいろな意味で新入生は着実に成長する気がします。「基礎文」で頑張った学生は、1年次後期に開講している「法学基礎演習」、「政治学基礎演習」に参加するケースが多いようです。

**Q: 「基礎文献講読」は今後、どのように発展していくのでしょうか。**

**佐々木:** 先ほどお話したように、来年度から「キャリア意識の形成」が2年次後期に移行します。そのような状況を踏まえて、1年次の早い段階で、とくに「基礎文」を利用して、自分のキャリアについて考える機会を設けようと計画しています。具体的には、現在キャリアセンターのアドバイスを得ながら検討していますが、「立教時間」(立教オリジナルのサイト。学内の正課外プログラムの情報や、4年間の時間軸に沿って学生生活を記録することができるキャリアポートフォリオの機能がある)を活用して、4年間の学生生活を自覚的に過ごす手がかりを提供する、そんなことを考えています。

## 法学部で国際性を身につける

**Q: 今後、どのような点に注目して、法学部の教育実践を発展させていこうとお考えでしょうか。**

**佐々木:** 意外に思われるかもしれませんが、法学部では留学する学生が多数います。また、全学共通カリキュラムの「国際協力人材育成プログラム」の受講者の四分の一が法学部の学生です。今年度から始まった「国連ユースボランティア」にも多くの法学部生が応募しました。われわれは学部生の中の一定数が国際的な活動に関心を持っていることに注目しています。

法学部には、法学科、国際ビジネス法学科、政治学科という三つの学科がありますが、学部では現在、「国際」と「ビジネス」をキーワードとして「国際ビジネス法学科」を中心に、学部カリキュラムの見直しを進めています。

まず来年度より、国際ビジネス法学科の学生が海外に出や

すくするために、協定校で取った単位を法学部の専門科目の単位に読み替えやすくする、あるいは全学的に講義の半期化をできるだけ進める、夏に「オックスフォードサマープログラム」を導入する、英語の授業を増設する等、さっそく始めます。なお昨年度からアメリカ人特任教授を任用し、英語による講義・演習クラスを開講しています。

学部では、2016年度学士課程統合カリキュラムを念頭に、今後さらに検討を重ねます。

## 「なぜ、法学部なのか」が問われている

**Q: 現在の取り組みとは別に、法学部の教育実践に関して課題に感じている点があれば教えてください。**

**佐々木:** 残念ながら、最近、法学部の人気は嘗てのようなものではありません。学生や保護者の方々は、大学で具体的に、実践的に何を身につけることができるのかということに大きな関心があるようです。以前の法学部では、「つぶしが効く」という売りがありました。確かに法学部は公務員や法曹志望のみならず、一般企業の志望者をも広く集めています。私も実はそれに惹かれた一人でした。しかし法学部をとりまく環境の変化、内外のニーズの多様化に伴い、この「つぶしが効く」ということでは、法学部の魅力の積極的な提示にはなりません。私は法律と政治を学ぶ学問的・社会的な意義、その重要性は全く変わっていないと考えていますが、「なぜ法学部で学ぶのか」という問いに対しては、より積極的な意義づけとなる答えを用意し、それを対外的に発信する必要を感じています。

今日申し上げた「キャリア意識の形成」、「基礎文献講読」の継続的見直し、学部の国際化対応などは、その一環です。

— 今日はお忙しいなか、色々とお聞かせいただきまして、どうもありがとうございました。

インタビューまとめ：学術調査員 御手洗明佳

## 近日刊行

### 大学教育開発研究シリーズNo.20

### 「アクティブな学びをデザインする vol.3 2学部における初年次演習科目の実践から」

今号冒頭で報告した2013年度FDワークショップ(授業見学)の記録冊子を、2014年3月に刊行いたします。見学当日の授業構成や関連資料、意見交換会での議論などを収録しています。ワークショップで得られた知見を共有していただける冊子となっておりますので、ぜひご一読ください。

当センターでは、2014年度も同ワークショップを開催する予定です。ご参加とご協力のほど、よろしく願いいたします。



# 紫縁談義

## シカゴでみた夢

私は1988年秋から10ヵ月間、当時の文部省在外研究制度を利用して、シカゴ大学社会学科に客員教員として滞在する機会を得た。留学ではないので単位を取る必要はないのだが、後学のためにいくつか授業にも出席した。

現地で緊張していたためか、帰国してからしばらく体調がすぐれなかった。ある友人に相談したところ、それは君がシカゴで理想をみたからだ。普通なら、要求水準を下げることで楽になるはずだが、せっかく理想をみたのだから、いますぐ実現できなくても気長に理想を追求すべきではないかと、心の琴線に触れるアドバイスももらった。たしかに、私はシカゴで、研究面でも制度面でも理想をみたのだ。

シカゴ大学は、1892年に大学院大学としてスタートした。当初からクォーター制をとり、ほとんどの授業は、夏学期を除く3つの学期に展開していた。夏学期はサマースクールや公開講座が中心である。私が滞在していた1980年代後半、授業シラバスは、授業の初回に教室で配布されていた。シラバスは、科目担当者によって個性があるものの、授業のスケジュール、とりあげる文献、単位取得の条件などが詳細に書き込まれていた。単位取得の条件には、たとえばレポートまたは筆記試験が選択可能といったように、複数のオプションが用意されているものもあった。また、週2回の授業の他に、週1回TAが指導する討論と講読の時間帯が設定されているものもあった。時間前に教室に入っているまじめな教授もいれば、いつも遅刻してやってくる教授もいる点は、日本の大学と同じである。オフィスアワー制度もこのときはじめて知った。教員の研究室のドアにはオフィスアワーの時間帯が掲示され、その時間帯にはドアが開放されて誰でも訪問できる。

授業料も従量制なのか、登録期間に遅れて追加登録をすると50ドル課金されるので注意することという掲示には笑えた。図書館は学生アルバイトを使って年中無休。教科書は、学内の書店で古書として売買されていた。

それからしばらくして日本で「大学改革」のかけ声がかまびすしくなり、「大学院大学」「シラバス」「オフィスアワー」「クォーター制」などの言葉が飛び交うようになった。いまのところバラバラに移植しているだけで、なかなか理想は実現しそうにない。それにしても、あの10ヵ月の体験が、その後の教員生活にこれほどまでに身近に関わってくることになるとは想像だにできなかった。

教務部長 社会学部教授

松本 康 (まつもと・やすし)

